

佐賀県研究成果情報

ニホンナシ「あきづき」の無着葉短果枝における早期摘果による次年度の花芽確保					
[要約]ニホンナシ「あきづき」の無着葉短果枝に結実した果実を満開後 20 日頃に全て摘果することで、短果枝の盲芽化を防ぎ、花芽を着生させることができる。					
果樹試験場・落葉果樹研究担当		連絡先		0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp	
部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象	ナ シ

[背景・ねらい]

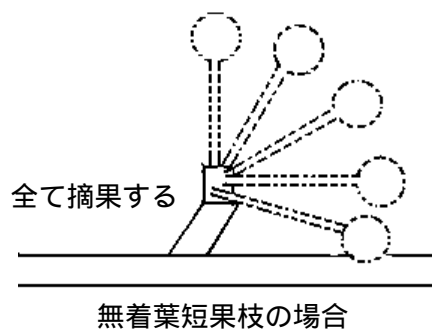
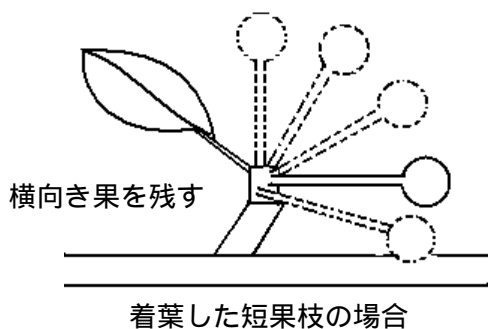
ナシの価格が低迷する中、本県では「豊水」に代わる品種として、果実品質が優れ、商品化率の高い「あきづき」の導入による産地の振興が期待されている。しかし、「あきづき」は長果枝における腋花芽形成が不安定であり、短果枝においても無着葉の花芽が多く発生する。無着葉の短果枝に結実した果実は小玉で低糖度であるため、収穫前に摘果せざるを得ないばかりか、摘果時期が遅れるとその短果枝には花芽が着生せず盲芽となりやすい。そこで、次年度の充実した花芽確保を目的として、無着葉短果枝における効果的な摘果処理時期について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 満開後 20 日頃の早期摘果では全ての短果枝に花芽が着生する（表 1、図 1）。
2. 満開後 50 日頃の慣行摘果（対照区）では約 4 割にしか花芽が着生せず、2 割弱は葉芽のみ、4 割強は盲芽になる（表 2、図 2、図 3）。
3. 満開前の摘らい処理では満開後 50 日頃の摘果処理後同様、約 4 割にしか花芽は着生しないが、摘果処理後には見られない新梢の伸び出しが見られる（表 2、図 4）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「あきづき」の盲芽発生防止技術として活用できる。
2. 短果枝から新梢の発生を促したい場合には摘らいを行う。
3. 「あきづき」は他品種よりも果梗が短く、果実の肥大によって上向き、斜め上向き果では果梗が折れてしまう恐れがあるため、着葉した短果枝で摘果を行う場合横向き果を残す（下図）。



[具体的データ]

表1 処理後の短果枝に着生した花芽の状況

試験区	処理時期	花芽が着生した短果枝率	平均花芽着生数 <sup>z)</sup>
摘らい処理区	開花直前	40.7%	1.7
早期摘果区	満開後20日	100.0%	1.3
対照区	満開後50日	38.9%	1.0

<sup>z)</sup> 各区花芽数の合計 / 花芽が着生した短果枝数

表2 処理後の短果枝の状況

試験区	処理時期	花芽のみ	葉芽のみ	花芽+葉芽	新梢伸長	盲芽
摘らい処理区	開花直前	29.6%	14.8%	3.7%	14.8% <sup>z)</sup>	37.0%
早期摘果区	満開後20日	5.0%	0%	95.0%	0%	0%
対照区	満開後50日	0%	16.7%	38.9%	0%	44.4%

<sup>z)</sup> 伸び出した新梢のうち葉芽のみ着生：7.4%、花芽+葉芽着生：7.4%



図1 花芽が2個着生した短果枝



図2 葉芽のみが着生した短果枝



図3 盲芽



図4 短果枝から伸び出した中果枝

[その他]

研究課題名：中生ナシ新品種の栽培技術開発による新出荷体系の確立

予算区分：県単

研究期間：2002～2007年度

研究担当者：稲富和弘、加藤恵、福田浩幸